

こころ日記

「ぼちぼち」

(6)これでよかったのかなぁ…

脇野 千恵

いつも子どもたちの進路選択の大切な時期になると、遠い昔の自分のことを思い出します。人生で初めての試験によって決まる自身の進路についてです。高校入試にどのように向き合い、悩み選択したのだろうか。今ほど情報やデータも少ない時代ですが、実力テストや定期テストがあると、やはり点数にとっても敏感になったものです。

もっと大切なのは、担任との関係です。色々なアドバイスをもらっても、信頼関係がないと、どうも受け入れることができません。私が3年の時に担任をしてくれた先生は理科の男の先生。ちょっと顎がしゃくられていたので、皆かげで“三日月”といっではからかっていました。一口に言うと怖い先生。授業中は妙な緊張感があり、怒りの標的にならないようにと目線や態度にとっても気をつけて生活していました。

私自身は家庭の事情が色々あり落ち着かない日々でしたが、それでもぼんやり

ながら教師になりたいなあという希望を持っていました。今ほど相談のための懇談会などもなく、ある日突然希望とは全く違う高校入試を告げられ、返す言葉もありませんでした。親との確執もあり、ただただ従うしかなかったことを覚えています。きっと私の知らないところで、親との話し合いがあったのでしょうか。

私も3年生を数回担任しましたが、いつも自分の苦い思い出が浮かんできて、私でいいのだろうか、私にそんな進路指導ができるのかと不安に思ったものです。

Y美は、陸上部でした。短距離が得意で、部活動にとっても熱心。学級ではどちらかというと寡黙でしたが、当番の仕事も嫌がらず引き受け、いわば学級では手のかからない子でした。

陸上の大会では、近畿大会出場に手が届くような成績を残し、学校では優良選手の一人でした。

彼女の将来の夢は何だったのか？正直覚

えていません。中学校では、ちょうど今ごろの時期になると、色々な高校の先生がやってきます。つまり中学校での大会記録が良い生徒の情報を集め、高校の部活動をより強化するために優秀な選手集めに奔走するのです。

推薦というのがそれに当たりますが、それには色々な条件が付いてきます。優秀な選手ほど、いくつかの高校の選択枠が広がるのも事実です。それを選ぶのは、もちろん本人です。三年間、年末と年始に数日の休み以外には、ひたすら部活動に心身共に打込むことが、まず第一の条件です。

正直、私が親なら、「そんな生活むりちゃう？」と、いくら自分の子を褒めちぎられても、辞めるよう言うてしまうでしょう。（我が子には、そのような機会はありませんでしたが）

私学であれば、やはり気になるのが学費のことです。親としても一番気にかかることでしょう。

当然のごとく、Y美にも某私学高校からの話が持ち上がりました。彼女との進路相談の中では、家庭の経済的な事情もあり、公立高校一本のみの受検と決めていると聞いていました。しかし、高校の先生からの申し出を勝手に断るわけにはいきません。彼女にそのことを告げると、親との相談の上相談に応じることになりました。

彼女の陸上部での成績や学校生活や部活動での態度などから、是非にうちの高校へと言われました。走ることが大好きなY美です。とても魅力のある学校生活を思い描いたにちがひありません。

しかも、親の気持ちを大きく動かしたのが、学費免除の条件でした。Y美自身、高

校へ行くこと自体が経済的負担をかけると遠慮がちだった高校進学です。私学となると、とても自分から行きたいなどとは言えません。

しかし進路は、急展開。彼女は高校の様々な部活動のプログラムにも同意し、入学することを決めたのです。

推薦となると、進路先が皆より早く決まります。ある意味子どもたちは、そういった友だちをうらやましく思ったりする時期でもあります。

彼女には、まだまだ先の公立の試験まで頑張る友だちのために、何かできることをしてほしいと頼みました。彼女は、学級文集や卒業に向けての行事の手伝いなど、惜しみなくやってくれました。

3月の卒業式を終え、4月、彼女は爽やかな表情で、高校の制服姿を見せに来てくれました。毎日の練習は大変だけれど、充実していると。中学校では見せたことがない、はきはきとした口調が印象的でした。

しかし一年後、Y美の良くない噂を聞きました。部活の中での人間関係がうまくいかず、学校に行っていないということでした。頑張っているものと思い込んでいた私は、どうしたものか、と同時に両親の顔が浮かんできました。

とても親思いのY美です。実は、進路決定したころ、父親は失業中。その中で選択したスポーツ推薦での入学です。親の期待も大きかったのではないかと想像すると、胸が痛みました。

しばらくして、Y美が不登校が理由で退

学してしまったと、高校の先生から連絡がありました。これから先どうするのかと心配していたところ、彼女は私のところにやってきました。

彼女の顔を見て、なぜ学校を辞めたのかということは、聞くことができませんでした。とても人に気をつかう子です。寡黙な上、スポーツ界の上下関係の厳しさには、到底ついていかれなかったのだということが察せられたからです。

彼女は申し訳なさそうに、次のステップとして、夜間高校にいきたいので手続きをしてほしいということを告げました。退学してもあきらめず、高校進学を志す気持ちに、私は心から応援やりたいと思いました。

過年度生として、無事に夜間高校に入学したY美は、時々学校にやってきては、

「先生、うちの学校茶髪ばかりやで。トイレ行くと煙もうもうやし。」

と夜間高校の実態を報告してくれました。しかし、彼女の表情はあの中学3年生だった頃の穏やかさに戻っていました。心底高校生活を楽しんでいるという雰囲気でした。

やはりY美は、走ることが好きだったのでしょう。夜間高校でも、陸上部に入り頑張り始めました。夜間高校ですから部活の部員も少なく、しかも毎日熱心に練習する生徒は希少価値だったと思います。高校体育大会では、もちろん代表選手として出場し、優勝しました。そして、選抜選手としての活躍は止まらず、近畿、そして全日本大会に出場することができたのです。

あの東京の国立競技場で自分の走りを見せたY美。その感動を早速報告しに来てく

れました。推薦入学した高校では、いくら頑張ってもそのような夢は実現しなかったことでしょう。

その後彼女は高校を無事に卒業し、今は自立しています。

私の話に戻れば、いい年をして何を今さらと思われるかもしれませんが、あの時もっと自分の考えを伝えることができれば、もっとしっかりしていればと思うことがあります。誰もが言う違う人生があったのではないかと。

しかし、今は思いもしなかったその高校で、普通ではできないたくさんを経験でき、今の私を支えとなっている多くのものは、その時の先生たちから学んだことです。まあそれはそれでよかったと思っています。

思春期にある子どもたちは、もうわけがわからずにいます。卒業した子どもたちに、受験期のあの頃のことを聞くと、自分でも何を考えていたのかわからない、とにかく周りの人に一杯迷惑をかけ、むちゃくちゃなことを希望していたなあと答えます。

その時はこれが最良の進路選択と考え、生徒達を送り出しても、その先はわからないものです。正しいとか、正しくないという問題ではなく、子どもにとっての進路決定とは何なのでしょう。いつ、だれが、どのようにして決めるのがいいのか。

今でも、一人ひとりのその後が気になる私です。

(中学校教員 脇野千恵)